

●家族の死

身にせまった恐ろしい砲弾の音！ババーンバシャ！ババーンバシャ！迫撃砲の集中攻撃という、100発も止まないという、ものすごい攻撃に合いました。来たぞ—来たぞ—と思っていたら、私はカズ子ちゃんの上にかぶさって、何となく叫びたくなかった。「1発に！」「1撃に！1撃に！・・・」生半かな怪我を負わないで一気に死にたい・・・。

兄さんの奥さんの初子お姉さんに破片が命中したのは、胸の中でした。心臓です。それで、初子お姉さんは1発で即死です。

たくさんの人が南の方へ逃げて行く。我々も南の方へ逃げれば安全だというように、何も言わないで、無口で、本当に、怖いから皆急いで・・・。

家族17人が真壁という村に入りました(地図7)。「真壁には井戸があるんだってよ」。皆にたくさんのお水を与えました。それから、ここが大変な所だという事を知りました。ここには、時間的に集中攻撃するアメリカ兵が、水汲みに来た沖縄の県民や日本兵を狙って、ババーン、ババーンと射撃して来るのです。8日の朝、私の母が撃たれました。母は私の息子の手を引いて、水を汲んでいました。右足の膝関節からもぎとられて出血多量で亡くなりました。

次に、私の夫のお母さんが、翌日亡くなるの。一諸に行動しなければいけないと思っていたのに、夫のお母さんは砲弾のカケラが体に入って死ぬんです。火花が散ったんです。真昼間だけど、ピカピカッとひかる物がある。それがサトウキビ畑だったものだから、サトウキビの葉っぱがもげて、夫の母は逃げ遅れた。母はもがいて、みるみるうちに下に沈んで行くのが分かりました。大きい声で「おばあちゃん！早く早く！」って言ったのに、火に足をとられてもがいて倒れていた。私と、夫の姉さん、2人は、両手に子どもを抱えて、2mもある土手の上に子どもを放り上げて・・・1人、2人と投げてから、這い登って、また両脇にかかえて避難した。

そしたら、「おじいちゃんが着いて来てない」と言う。おじいちゃん毎日毎日、嫁を亡くし、私の母を亡くし、自分の妻を亡くし、大変疲れていたと思います。「僕はもういいよー」と言う声を最後に聞きました。

●カズ子ちゃん(7ヶ月半)が、轟(とどろき)の壕で亡くなる

「伊敷という村の前に大きな口を開けた轟(とどろき)の壕があるから行ってみなさい」と聞きました。日本軍の壕に入れてもらおうとして、壕の名前は分かりませんが、「兵隊さん、お願いします。子どもだけでも、壕の中に避難させて下さい」とお願いしたら、「何を言うか、馬鹿野郎！」と言われました。「馬鹿野郎、君達がここに追いついて来ているから、戦争がこのような形になっているんだぞ！そこに立つと電波探知機に知られて、集中攻撃くらうよ。回れ右して帰れ！」って、長靴はいてましたから、将校だと思いますよ。悲しかったですね。戦争が始まる前、守備隊として来た時には、良くしてくれたのに。私達も兵隊をたよりにしていました。

言われたとおりに轟の壕を見つけました。ここで命がもらえと思ったのは間違いでした。食料は米一合も持っていません。ここには何もありません。時間が経ったら子どもたちの物ねだりが始まり「母ちゃん、水が飲みたい、まんまが食べたい、外に出たい、こわい！」暗いから怖いんです。「我慢してね、戦争が終わるから、終わったらやってあげるよ」と毎日ウソばかり言って子ども達をなだめていました。「ね、いつ終わるの？」「もうすぐ、そしたら、たくさんご馳走あげるから、ガマンしよう」。私は、カズ子ちゃんに離乳食あげた事がない。

毎日のように弱い泣き声があちこちで聞こえる。そしたら、1人の兵隊が横穴から出てきました。ガチャガチャと鉄砲を持って・・・鉄砲の先に剣を付けています。光に反射しています。「沖縄の皆さん、子ども達を泣かすな。子どもを泣かすと、殺すぞ！殺してやるぞ！」だから、どこのお母さんも子ども泣かないように必死になる。

おにぎり1回食べた。生エンドウ食べた・・・と2週間たつうちに16日は漆黒の闇になりました。ヤミの中でカズ子ちゃんに異変が起きます。2～3日目から、オツパイ吸えなくなっていたんです。口までもっていても吸う力がない。スツと離しちゃう。暗いから見えない。呼吸が止まっている。息をしてない。夫と姉さんと3人で一生懸命、体を撫で回して体温を作ろうとしたが、カズ子ちゃん、とうとう6月16日の夜中、あの世に・・・悲しい話です。これはね、今まで、大きい声で話せなかった(涙を拭う)でもこれを語らなければ、証言にならないから(涙声)。自分の子どもをね・・・カズ子ちゃんを亡くし、いつまでも抱きしめておきたい。自分もそのうち死ぬであろうと思っていました。口では言わないけれど、みんな死を覚悟していました。

カズ子ちゃんが死臭を放つようになると、迷惑をかけるから、葬ってあげようということになった。抱きしめておきたいと思ったけれど、乾燥芋のように軽くなったのを右手にだっこして、左手で壁をつたいながら、奥の方へ人間のいない、声のしない所に連れて行ってカズ子ちゃんを寝かせて溜まり水をかけて。穴を掘るんじゃないんですよ、お別れをして・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・あなたを産んで、10月10日から戦争になって、あなたを生かす事が出来なかった。ごめんね。母ちゃんもそのうち行くから、恐がらないで、寂しがらないでとひざまずいて、お別れをして誓いました(どっと涙があふれてハンカチを当てる)。本当にね。こんなに65年経ってもね。あの日の様子が目の前にありありと見える。カズ子ちゃんを寝かせて、子どものいる所に出てきたら、子ども達の物ねだりが始まって、「我慢して。戦争が終わったらいっぱいあげるから」とウソをつきました。

(取材日:2011年2月6日)